

販売車や朝市生活の命綱

未来をひらく

《第1部》ふるさとマップブデート

「とく、とく、とく、とく」とパーマーケットの運営くし丸。軽快なメロディを響かせ、住宅街を走る軽車両。荷台を開くと、棚いっぱいに積まれた商品が目飛び込む。肉や魚、野菜などの生鮮食品からトイレットペーパーや洗剤といった日用品まで、その数およそ1200点。街角に小さなスーパーが出現する。アルピコグループでス

ーパーマーケットの運営を手掛けるデリシア（松本市今井）が令和元年9月に松本市で運行を開始した移動販売事業だ。塩尻市など県内7市にエリアを広げ、今年4月には木祖村も加わった。全国で移動スーパーを手掛ける「とくし丸」（徳島市）と提携し、運転を担う「販売パートナー」と呼ばれる個人事業主が確保できたエリアから順次、運行を始めている。

⑨ 買い物弱者 救おう

「足腰が弱って買い物に行けなくなった」「運転をやめたので出掛けるのが難しい」。買い物に困難な状況に置かれて

いる人たちに商品を届け移動販売は、住民のニーズを地道に発掘し、それらの点を線で結ぶ。事業を担当するデリシアの耳塚浩典課長は「利便性の向上のみならず、とくし丸を通じて住民に元気を届けたい」と話す。現版の「御用聞き」は、住民のライフラインの役割も担う。



多彩な食品や日用品などを載せた「とくし丸」。運行開始を前に、荷台に商品を積み杉下紀昭さん＝塩尻市贄川。塩尻市南部と木祖村の顧客を個別に巡る（デリシア塩尻東店）

成18（2006）年度に「住民の力で村を元気に」と始まった活動で、長が運営する。有志でつくる「おんたけ朝市の会」（下出謙介会

年月を重ね、朝市の会員が「買い物難」に直面する年齢になった。下出会長は「村民に寄り添い、協力していこうよ」という活動に変わってきたという」と話す。多くの観光客を呼び込んだ朝市は、運営側と利用者が当事者意識を共有し合い支え合う活動に深化しつつある。

この春、朝市が開かれる村公民館の一室であったスマートフォン教室を返納した大家幸雄さん（87）「村内中越」の姿があった。「村内は坂道ばかり。車がないというのは大変なこと」と話しながら「スマホを使って買い物ができるそうだ。楽しみ」。買い物弱者に甘んじるつもりはない。

（向山均）

みんなの一言

- ・公共交通が貧弱すぎて高齢者の足がない。（安曇野市穂高柏原、契約社員女性、56歳）
- ・車がないと、買い物や用事に出かけられない。困っているお年寄りが多い。バス停まで歩いていくのが大変。

（松本市梓川梓、男性、79歳）

※市民タイムスのHPなどのアンケートより

